View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kwansei Gakuin University Repository

関西学院大学リポジトリ
Kwansei Gakuin University Repository

格助詞に見られる交替のメカニズムに関する研究

著者	高山 弘子
URL	http://hdl.handle.net/10236/00027302

氏　　名	**高　山　弘　子**
学位の専攻分野の名称	博 士（言語コミュニケーション文化）
学 位 記 番 号	甲言第25号（文部科学省への報告番号甲第642号）
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
学位授与年月日	2017年７月26日
学 位 論 文 題 目	**格助詞に見られる交替のメカニズムに関する研究**
論 文 審 査 委 員	（主査）教 授　于　　康
	（副査）教 授　大　髙　博　美
	教 授　神　崎　高　明
	岸　本　秀　樹（神戸大学大学院人文学研究科教授）

論 文 内 容 の 要 旨

高山弘子氏の学位申請論文は、「格助詞に見られる交替のメカニズムに関する研究」と題して、①日本語母語話者に見られる「に」と「を」の交替はどのような範囲で生じるのか、②日本語母語話者における「に」と「を」の交替にはどのような条件や傾向があるのか、③日本語母語話者における「に」と「を」の交替はどのようなメカニズムで生じるのか、④日本語母語話者では、同一の動詞において、「に」も「を」も取りうるにもかかわらず、中国語を母語とする日本語学習者の用例では、なぜ「に」または「を」の誤用と判断されるのか、を研究の目的としている。

本論文は、序章、６章、結章から構成されている。

「序章」

序章では、＜対象＞を表す「に」「を」間の交替について、その研究目的と研究意義を明らかにし、研究対象、使用データ、研究方法について述べる。その後、本研究の構成、各章の内容について概説する。

「第１章　先行研究と問題点」

第１章では、母語話者の「に」「を」間における交替について指摘された先行研究を挙げ、その問題点を述べる。次に、学習者における「に」と「を」の誤用に関する従来の研究を取り上げてその問題点を指摘し、最後に先行研究の問題点について整理する。

「第２章　＜対象＞を表す「に」「を」交替の全体的傾向」

第２章では、「に」と「を」の交替について、定量的及び意味的な面から全体的な傾向を分析する。その上で、どのような範囲で交替が生じるのかを明らかにする。また、交替の下位分類を示し、研究の土台づくりを行う。考察の結果をまとめると次の通りである。

①「に」と「を」交替は、「に」が優勢であるものと、「を」が優勢であるものがあり、「に」が優勢であるものの方が多い。また、交替の約９割は「に」と「を」のどちらと結びつくかにかなりの偏りがある。

②「に」「を」間の交替は、＜対象＞を下位分類化すると、＜使役性が関与する感情の対象＞＜使役性が関与しない感情の対象＞＜態度表出の対象＞＜勝敗の対象＞といった意味関係で結ばれる時に生じると

言える。

③②は、何らかの動きは有するが、物理的、直接的な働きかけがない動詞と名詞句との間に成り立つ意味関係である点で共通する。

「第３章　＜使役性が関与する感情の対象＞における「に」「を」交替」

第３章では、まず第２章で下位分類した意味関係のうち、＜使役性が関与する感情の対象＞を表す際に発生する「に」「を」間の交替に関して考察する。＜使役性が関与する感情の対象＞は、原因的使役文で表せ、使役性を持つ心理動詞と名詞句が共起する際に生じる意味関係であった。このような意味関係が成り立つ心理動詞には、「飽きる」「呆れる」「恐れる」「おびえる」「驚く」「悲しむ」「苦しむ」「困る」「ためらう」「嘆く」「悩む」「迷う」「喜ぶ」が該当する。以下では、交替の発生条件及び傾向とメカニズムを明らかにした上で、母語話者では「に」も「を」も取りうるが、学習者では選択規則に反するために、「に」または「を」の誤用と判断されるものに焦点を当て、その要因について探る。なお、ここでは、まずは典型的な交替の発生条件や傾向、メカニズムについて明らかにすることを目的とし、ある程度交替の用例が見られる「恐れる」「驚く」「悲しむ」「嘆く」「悩む」「迷う」「喜ぶ」を中心に考察を行う。考察の結果をまとめると次の通りである。

①時間的な性質としては、動詞の発生性と継続性の違い、名詞句の成立未成立の違い、過程性の有無が関わっている。動詞に関しては、発生性を表す時は「に」を取り、継続性を表す時には「を」を伴う。名詞句の成立未成立が関わるものは、成立した事態では「に」と共起し、未成立の事態では「を」を取る。また、過程性の有無が関わるものでは、過程性がなければ「に」を取り、過程性があれば「を」を取る。

②時間的な性質以外には、現場性や動詞の意味が関わっている。［成立］の特性を有する名詞句を伴う時には、現場性がある事態では「に」を伴う傾向が見られる。一方、［未成立］の特性を持つ名詞句を取る時には、動詞に［考える］要素がなければ「に」と、［考える］要素があれば「を」と共起する。

③①②は感情が発生する原因となる名詞句に焦点が当たる時には「に」で表され、結果の状態に着眼点が置かれる時には「を」を伴うという点で共通する。感情の発生の原因となる名詞句と結果状態のどちらに着眼点を置くかは、名詞句をとりたてたいかどうかが関わる。名詞句を際立たせたければ「に」で表され、そのとりたてを回避させたければ「を」を伴う。このことから、「を」には、「に」によって名詞句がとりたてられるのを阻止する役割があると捉えられる。

④学習者において「に」または「を」が誤用と判断されるのは、時間的な性質または現場性に関する母語話者の選択傾向に反するためである。このことは、結局は母語話者における名詞句のとりたての傾向と一致しないことに起因する。

「第４章　＜使役性が関与しない感情の対象＞における「に」「を」交替」

第４章では、母語話者における＜使役性が関与しない感情の対象＞を表す「に」「を」間の交替と、母語話者では「に」も「を」も取りうるが、学習者では「に」または「を」の誤用と判断されるものについて考察する。考察の結果をまとめると次の通りである。

①「こらえる」「耐える」など［我慢する］要素を持つ動詞では、すでに発生した感覚や感情、状況などを我慢するという意味の時に交替が見られる。また、同じ意味で使われる時でも、経験者の事態への関与度の差が発生し、通常伴わない「に」または「を」も取りうるようになることで交替が生じる。事態への関与度が高い時には「を」を伴い、事態への関与度が低い際には「に」で表される。

②「あこがれる」「こだわる」では、目標となりうる名詞句を伴う時に「に」を取りやすく、目標とは捉えにくい名詞句を伴う時には「を」と共起しやすい傾向がある。目標として設定しにくい名詞句の性質

を伴うことによって、意味関係に＜目標＞の要素が薄れ、それを「を」で表すことが多くなることで交替が生じる。

③関与度の高低があることにより交替が生じるのは、事態への関与度が低い際には、名詞句をとりたてるために「に」を取り、事態への関与度が高い場合には、名詞句が際立たないことで「を」と共起するためである。また、意味関係に＜目標＞の要素が希薄になる時に「を」を伴うことが多くなるのは、＜目標＞の要素と、目標となる名詞句を際立たせたくないためである。これらから、「を」には、「に」によって名詞句がとりたてられるのを阻む役割があると考えられる。

④母語話者では＜使役性が関与しない感情の対象＞で「に」も「を」も取ることがあっても、学習者の「耐える」「あこがれる」などの用例において誤用と判断されるのは、経験者の事態への関与度や＜目標＞の要素を含意する意味関係を伴うかどうかにおける母語話者の選択傾向と一致しないためである。このことは、つまり、母語話者の「に」によって名詞句をとりたてて述べる傾向との間にずれがあることに起因する。

「第５章　＜態度表出の対象＞における「に」「を」交替」

第５章では、まず母語話者において、＜態度表出の対象＞を表す際に見られる「に」「を」間の交替の発生条件と傾向を示した上で、そのメカニズムを明らかにする。その後、母語話者では「に」も「を」も取りうるが、そこにある何らかの規則性に反するために、学習者では「に」または「を」の誤用と判断されるものに焦点を当て、その要因について探る。考察の結果をまとめると次の通りである。

①「構う」では、継起、付帯状況を表す「ずに」「ないで」が接続する時、「ＹはＸ ｛に／を｝ 構うＺがない」の時、禁止を表す時には「に」が優勢の交替が見られる。これらの形式で表されることによって、対象に焦点が当たり、それをとりたてるために通常は「に」を伴う。しかし、名詞句の際立ちを回避させたい時に「を」も伴うようになり、交替が生じる。一方、その他の否定の形または肯定の形で表される時には均等に交替が生じる。この時には、動作の対象への影響度が関与し、対象への影響度が高い時には「を」を取り、影響度が低い時には「に」で表される。この場合の「を」は＜動作・作用の対象＞の要素を持つ。

②［力を尽くす］要素を持つ「頑張る」「努める」「励む」では、名詞句の持つ結果または限界点、動作という２つの局面のうち、結果または限界点に着眼点が置かれる時には「に」で表され、動きの局面に焦点が当たる時には「を」で表されることで交替が生じる。結果または限界点は、目標地点と捉えられ、＜目標＞が含意される意味関係が生じる。つまり、＜目標＞の要素を消し、名詞句がとりたてられるのを避けたい時には意味的にニュートラルな「を」が選択され、反対に＜目標＞の意味関係を明確にし、目標に当たる名詞句をとりたてたい時には「に」で表されることで交替が発生する。

③「凝る」では、「追求する」の意味を表し、個別性の低いモノ名詞を伴う時に交替が生じやすい。これは、＜目標＞の要素と、目標となる名詞句を際立たせたくないために「を」で表されることが多くなるためである。

④「親しむ」では動詞の意味と、動詞らしさの消失という動詞の性質が交替に関わっている。動詞としての働きが希薄になることで、意味関係を明示するのを回避するために、「を」で表されることがあり、そのために交替が生じると捉えられる。

⑤このように、否定の形で表される時の対象の焦点化、動作の対象への影響度、意味関係における＜目標＞の要素の含意の有無、動詞らしさの消失から交替が生じるが、名詞句をとりたてたい時には「に」が選択され、名詞句の際立ちを回避するために「を」で表される点は共通する。このことから「を」には「に」を取ることで名詞句にフォーカスが当たるのを阻止し、際立たせないようにする役割があると

考えられる。

⑥「頑張る」「凝る」「応じる」などで、学習者が用いる「に」または「を」が誤用と判断されることがあるのは、＜目標＞の要素を表す意味関係や動詞の意味などに関する母語話者の選択傾向と一致しないためである。これらは共通して、母語話者の名詞句をとりたてて述べるところで「に」を取り、とりたてずに表すところで「を」を伴うという「に」「を」間の傾向とずれがあるためである。

「第６章　＜勝敗の対象＞における「に」「を」交替」

第６章で取り上げる＜勝敗の対象＞とは、第２章で分類した通り、「勝つ」「敗れる」「受かる」「負ける」「落ちる」「通る」などが、勝敗や合否が決まる相手や出来事を表す名詞句を伴う時に生じる意味関係であった。第６章では、まず母語話者において、＜勝敗の対象＞を表す際に、どのような条件下で「に」「を」の交替が見られるのか、またはどのような傾向を示すのかを明らかにし、そのメカニズムについて考察する。その後、学習者に見られる「に」または「を」の誤用が、母語話者での共起傾向とどのように異なるために誤用と判断されるのかについて明らかにする。考察の結果をまとめると次の通りである。

①以下の名詞句を伴う時に、「に」「を」の交替が見られる傾向がある。

a.「勝つ」「負ける」「敗れる」「落ちる」「受かる」「通る」が、勝敗や合否などが、何において決まるのかという内容または範囲を表す名詞句を伴う時

b.「落ちる」が、内容や範囲の所属先を表す名詞句を伴う時

c.「欠く」がコト名詞を取る時

②「勝つ」などは基準点を表す名詞句を取り、「に」によって＜基準の対象＞を含意する意味関係で表されるのが典型である。しかし、名詞句が基準点になりえず、＜基準の対象＞の要素を持たない時に「を」も取りうるようになり、交替が生じる。この時「を」で表されるのは、＜基準の対象＞の要素と基準点となる名詞句を際立たせたくないためである。このことから、「を」には、「に」を伴うことで名詞句がとりたてられるのを阻止する働きがあるのではないかと想定される。

③学習者の誤用の例にある「通る」自体は、母語話者でも「に」も「を」も取りうる。しかし、母語話者では個別性の高い名詞句を伴う時や＜経過域＞の読みができない時には「を」は取りにくい。このことから、この例では「を」よりも「に」で名詞句を際立たせる方が母語話者の語感では自然であると捉えられ、誤用と見なされたと言える。

「結章」

本研究は、具体的には以下の４点を明らかにすることを目的としていた。

Ⅰ）日本語母語話者に見られる「に」と「を」の交替はどのような範囲で生じるのか。

Ⅱ）日本語母語話者における「に」と「を」の交替にはどのような条件や傾向があるのか。

Ⅲ）日本語母語話者における「に」と「を」の交替はどのようなメカニズムで生じるのか。

Ⅳ）日本語母語話者では、同一の動詞において、「に」も「を」も取りうるにもかかわらず、中国語を母語とする日本語学習者の用例では、なぜ「に」または「を」の誤用と判断されるのか。

これらの４点について、考察を行った結果は以下の通りである。

①＜対象＞を表す「に」「を」間の交替は、下位分類すると、＜使役性が関与する感情の対象＞＜使役性が関与しない感情の対象＞＜態度表出の対象＞＜勝敗の対象＞といった意味関係で結ばれる時に生じる。これらは、何らかの動きを有するが、変化や打撃、作成等の物理的、直接的な働きかけがない動詞と名詞句との間に成り立つ意味関係である点で共通する。

②日本語母語話者における「に」と「を」の交替には、下位分類毎に見ると、下記のような条件や傾向があり、

それぞれ次のようなメカニズムによって生じる。

a. ＜使役性が関与する感情の対象＞の意味関係の時の交替には、動詞と名詞句の時間的な性質、現場性、動詞の意味が関与する。これらに起因して、感情の原因と心的状態のどちらが焦点化されるかが異なり、感情が発生する原因となる名詞句に焦点が当たる時には「に」で表され、心的状態に着眼点が置かれる時には「を」を伴う。

b. ＜使役性が関与しない感情の対象＞の意味関係で結ばれる時は、経験者の事態への関与度や意味関係に＜目標＞の要素が含意されるかどうかの違いによって交替が生じる。経験者の事態への関与度が低い時、または意味関係に＜目標＞の要素を有する際には「に」を取り、経験者の事態への関与度が高い時、或いは意味関係に＜目標＞の要素が含意されない場合には「を」と共起しやすい。

c. ＜態度表出の対象＞を表す時の交替には、否定の形で表される時の対象の焦点化、動作の対象への影響度、意味関係に＜目標＞の要素が含意されるかどうか、動詞らしさの消失が関わる。否定の形で表され、対象に焦点が当たる時、動作の対象への影響度が弱い時、意味関係に＜目標＞の要素を有する際には「に」を伴う傾向がある。一方、否定の形を伴い、対象が焦点化されない時、動作の対象への影響度が強い時、意味関係に＜目標＞の要素を帯びない時には「を」で表されることが多くなる。また、動詞らしさが希薄になった時にも「を」を伴いやすい。

d. ＜勝敗の対象＞における交替には、意味関係に＜基準の対象＞の要素が含意されるかどうかが影響する。＜基準の対象＞の要素を含む意味関係では「に」を伴うが、そのような要素を持たない時には「を」も取りうるようになり、交替が生じる。

③上記②のように、交替には感情の原因と心的状態の焦点化、経験者の事態への関与度、否定の形を伴う時の対象の焦点化、動作の対象への影響度、意味関係に＜目標＞や＜基準の対象＞の要素が含意されるかどうか、動詞らしさの消失が関与している。これらは、つまりは名詞句をとりたてるかどうかが関わり、名詞句を際立たせる時には「に」で表され、名詞句をとりたてない時には意味的に無標である「を」を伴う点で共通する。従来から「を」は意味的にニュートラルであると指摘されることはあった。しかし、ニュートラルであるだけではなく、「に」と「を」のどちらでも、＜対象＞の意味関係を明示することができる状況下で、あえて「を」と結びつくのは、「を」には、「に」によって名詞句がとりたてられるのを阻止する役割があると捉えられる。

④日本語母語話者では、同一の動詞において、「に」も「を」も取りうるにもかかわらず、日本語学習者の用例では「に」または「を」の誤用と判断されるのは、動詞と名詞句の時間的な性質や現場性、事態への関与度、意味関係における＜目標＞や＜基準の対象＞の含意の有無などに関わる日本語母語者の選択傾向と一致しないためである。このことはまとめると、日本語母語話者の名詞句をとりたてるかどうかによる「に」と「を」の選択傾向とずれがあることによって誤用が生じると言える。

論文審査結果の要旨

高山弘子氏の学位申請論文は、これまで明らかにされていなかった格助詞に見られる交替のメカニズムに着目し、日本語母語話者に見られる「に」と「を」の交替のプロセスや中国語を母語とする日本語学習者に見られる「に」または「を」の誤用の実態を明らかにした上で、「に」と「を」の交替のメカニズムを解明することを目的としている。

本論文の最大の特徴は、大規模な日本語コーパスと大規模な中国語母語話者日本語学習者の作文コーパスを駆使し、日本語学習者の誤用との対照という視点も取り入れ、明快な論述で、「に」と「を」の交替のプロセスとメカニズムを解明したことであろう。以下において、本論文のオリジナリティと独創性を中心に審

査の結果をまとめる。

１.「に」と「を」の交替条件の明示化

日本語母語話者に見られる「に」と「を」の交替の範囲と条件は、「に」と「を」の交替のメカニズムを明らかにするための必要不可欠の前提である。本論文は、どのような類型の動詞やどのような類型の「対象」なら交替が生じるか、また、関与度、影響度、焦点化などがどのように「に」と「を」の交替に関わっているかといった交替条件を見いだし、明示化したことに成功したものと考えられる。これにより、これまでケースバイケースの個別事象の究明から脱皮し、一般化を求めるルールの究明に前進したと言えよう。

２.「に」と「を」の交替のメカニズムの究明

「に」と「を」の交替のメカニズムの究明は非常に難しい課題である。本論文はまず先行研究を丁寧に精査し、的確に分析を行い、次に先入観に左右されず、膨大なデータを駆使し用例を集め、丁寧に解析を行った上で、これまで指摘されていなかった「に」と「を」の交替の条件を明らかにした。さらに日本語学習者の誤用例との対照を進めながら、明らかになった「に」と「を」の交替の条件を手がかりに「に」と「を」の交替のメカニズムを究明した。研究の手順が論理的であり、かつデータ分析も理に適っていることから、究明された「に」と「を」の交替のメカニズムの結論は首肯できるものと言っても過言ではないであろう。

３．学習者の「に」と「を」の誤用原因の究明

日本語母語話者では、同一の動詞において、「に」も「を」も取りうるにもかかわらず、中国語母語話者の日本語学習者の用例では、「に」か「を」の二者択一の現象が生じている。つまり、統語論的には「に」でも「を」でも成り立つのに対し、実際の使用においては、「に」を「を」に、「を」を「に」にといったように1つしか選択できないという現象が生じている。この現象から、「に」と「を」の交替が恣意的なものではなく、制約を受けるものであるということがわかる。学習者の誤用から観察するというこれまでなかった研究視点が非常にすぐれており、「に」と「を」の交替のメカニズムの究明に決め手となり、大いに評価したい。

本論文は、日本語の「に」と「を」の交替のメカニズムを解明することを試みるものである。この試みについては、審査員一同が高く評価している。全体的な構成についても、論理的であり、合理性のあるものと認められた。特に、日本語母語話者の実例との対照研究の観点から、「に」と「を」の交替に関する詳細な分析とメカニズムの解明を行ったことについては、高山弘子氏の独創的な知見が見られ、ほぼ成功している。また、使用されているデータも豊富で、論証も綿密であり、結論についても首肯できるものである。さらに、本研究は、日本語の研究においても、日本語教育の研究や第二言語習得の研究においても、非常に重要でかつ必要であるので、先駆的研究であると言えよう。

このように、高山弘子氏の学位申請論文は極めて高い学術内容を持つものであるが、問題点が一切ないというわけではない。特に統語レベルと意味レベルでの「対象」の捉え方の乖離やそれが「に」と「を」の選択への影響などを明らかにして初めて、「に」と「を」の交替のメカニズムの核心に迫ることになるであろう。これらの問題点は、今後の課題となるが、本論の博士学位請求論文としての価値を損なうものでは決してない。以上、審査員４名は高山弘子氏の論文を慎重に審査し、2017年６月17日に行った口頭試問の結果を併せて協議した結果、高山弘子氏の論文が博士（言語コミュニケーション文化）の学位を授与するに相応しいものであると判断するに至り、ここに報告するものである。